




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2970 号	氏名	守永 圭吾
審査担当者	主査 桑野 剛一  副主査 坂本 照夫  副主査 明石 英俊 		
主論文題目： <div style="text-align: center;">創内持続陰圧洗浄療法における洗浄効率についての実験的研究</div>			

審査結果の要旨（意見）

成人病に付随する動脈硬化性疾患及び患者高齢化による疾患は現在わが国でも増加の一途をたどっている。さらに医師、看護師不足によるマンパワー不足が追い打ちをかけている。本研究は、これらの問題にかかわってくる難治性潰瘍、感染創の効率的な保存的加療法に着目されている。最近創面に対して陰圧をかけることで創面の活性化、創の収縮効果がある局所陰圧閉鎖療法が注目されている。しかし、その問題点として感染のコントロールが困難なことである。一方以前より感染創にたいして洗浄治療は一般的である。これらを掛け合わせた治療法が創内持続陰圧洗浄療法であるが、その最も効率的な洗浄法は報告されていない。今回の報告では洗浄水、洗浄流量、吸引圧、フォーム材、チューブの本数などを一定とした条件下で実験的研究がなされている。一般的な創をモデルとした洗浄、吸引チューブの留置位置と種類についてその有効性が示唆されており、また、すぐに臨床に応用可能であることを考慮する学位論文として価値あるものと判断した。

論文要旨

感染創や難治性潰瘍に対して有効性の高い創内持続陰圧洗浄療法をより効率的に行うことを目的とし、洗浄と吸引チューブの最適な留置位置と種類について検討する。実験には、創内持続陰圧洗浄療法装置（グンゼ社製、GKC-10）、3種類の創モデル（深さ 1.2 cm、3 cm、8 cm）と3種類のチューブ（先端のみが開いているノーマルチューブ、側溝のあるフ汁が消失してゆラットチューブ、直接フィルム材に貼れるフランジチューブ）を用いた。それらの組み合わせによって、いずれのパターンが最も効率的に洗浄効果が得られるかを検討した。その検証方法については、フォーム材の中の墨く状況を写真撮影することで判定した。浅い創モデル（深さ 1.2cm、3 cm）では、ノーマルチューブを洗浄と吸引の両方に用い、それらの先端を創の両端に留置する形式において洗浄効果が最も高かった。また、深い創モデル（深さ 8cm）でも、ノーマルチューブの先端を創の底面近くの両端に留置する形式において、創底面の十分な洗浄効果が得られることがわかった。今まで我々は、多数の側孔をあけたチューブを用いてきたが、今回の結果より、ノーマルチューブを用い創縁の相対する点と点で洗浄と吸引を行うことが最も効率的であることがわかった。従って、通常の陰圧閉鎖療法で使用されているフランジチューブの先端にノーマルチューブを連続させたものを工夫することで、より簡便で効率的な洗浄が行えると考えられる。